

座 談 会

“天気”第18期編集委員を終えて

本誌は発刊以来23年を経過し、一つの型ができてしまった感じがする。最近の“天気”に対して会員の方々はどのような感想をお持ちだろうか。おそらく不満を抱かれる点が多々あることと思う。編集委員会では少しでも内容を改善し、既成の殻から脱皮しようと考え、かなりの時間をかけて討論を行ない、計画を練ってきた。しかし、残念ながら企画の多くを実行に移せないままに第18期の編集委員の任期が終ってしまった。その原因は、一言でいえば編集委員会にそれだけの余力がなかったという他ない。これまでは、気象庁内の編集委員が原稿の受付から雑誌の発行まで一切の編集事務を受持ち、それ以外の委員がそれぞれ現在の解説・用語解説・質疑応答等一人一分野を受持つ（論文は全委員）ことで現状維持で手一杯であった。

そこで第18期の編集委員会では、まず財源確保のため広告を掲載し、編集委員の負担を軽減するために、その収入で編集書記をおくことにしたことはすでにお知らせした通りである。ようやくこの態勢が軌道に乗り、編集事務が円滑に進むようになった。おそらく第19期の編集委員会では、長年の夢がかなって幅を広げた編集が可能になり、会員の満足が行く“天気”へと発展すると思われる。しかし、編集委員会が張り切っても会員の協力と理解なしに雑誌を作ることはできない。そこで、あえて編集委員会の生の声を会員にお知らせすることにした。

以下は、去る9月3日、東京管区気象台会議室に於て開かれた、“天気”編集委員会と、それに引き続き持たれた第18期の反省会を兼ねた座談会の模様である。ここに取り上げられた問題について、各方面の方々のご批判やご提言をお寄せいただけたら、と思う。（編集委員会）

「出席者」

河村 武・関根勇八・巽 保夫・滝川雄壮・中山 章・住 明正・竹田 厚・清水喜允。

（誌上参加）樋口敬二・廣田 勇・藤尾勝巳・大西慶市・三谷一郎・八田琢也・菊地勝弘。

1. 原稿不足は共通の悩みの種

司会：「今日は遠い所をようこそ。この2年あるいは4年間、それぞれに仕事を分担していただいたわけだが、やってみて、ここは直した方がいいとか、会員にこういう事を希望するとかいう事があると思う。今日は思いついた事をどんどん言っていたきたい。」

A：「（質疑応答で）質問の内容が、例えばタイムリーで面白いと思われるものは何んとしても取上げるように努めているが、そうした質問には解答も難しく、解答者が得られなくて結果としてはまだ取上げられていないものもあり、担当者としては申し分なく思っている。また、質疑応答欄への質問の少ないのは質問の程度・範囲などが漠然としていてかえって質問しにくいようにも思われる。」

B：「（解説でも）こちらで選ぶ程多くの投稿が欲しいのだが、今は企画と解説者探しに追われている状態で、考える余裕がない。」

C：「各管区気象台で行われている毎年の地区研究会では沢山の研究、調査の発表がありその内容は多彩であ

る。この中から特に若い方の調査を取上げて天気に掲載するようにしたい。地区の会員にはよい刺激になるだろう。この世話は各管区の調査課長（地区編集委員）が積極的に骨折って欲しい。そうすれば原稿不足などあり得ないと思う。レフリーにおいてもこの点を配慮して下さればよい。」

D：「各管区の技術誌に載ったもので天気に掲載して欲しいものがある。」

昭和50年の天気総頁数666頁中、論文の頁数は268頁であり、40%になる。天気は集誌とならんで学会機関誌であることから、せめて論文の数を50%以上にする必要があると思う。」

E：「（用語解説では）どういう用語を対象とするべきか困っている。例えば、ある用語について質問が出て、その専門分野の人には辞典を見ればよいということになるわけだが、一般の会員が誰でも気象用語辞典を持っているわけではない。これまでのように、多くの人に興味を持てるトピック的な言葉を選んで取上げていくのは限界というか、タネがきれたという感じ

だ」

- F**：「そういえば、最近特殊な用語が多いという声もある。今後用語委員会が継続するなら、用語委員会とも接触して助けを借りてみてはどうか。」
- C**：「特殊な用語だけを取上げるのではなく、基本の用語をもう一度見直して、わかりやすい解説で載せてゆくのもよいのではないか。会員にはいろいろな方が入っておられるのだから。」
- G**：「新しい用語だけでなく、一般に使用されている用語であってしかも往々にして誤まって用いられているような用語を取上げるのも一方法だろう。」
- H**：「用語解説は、辞典の無味乾燥な記事と違って、その用語の持つ意味や気象学の中での位置づけなどに、著者の考えが色濃く表われている。そういう所で読む面白さがあるのではないかとと思う。」
- I**：「最近、春秋の学会後の座長によるレビューがなくなったが、学会発表後の廊下での雑談はまさに用語解説や質疑応答の発掘場だと思う。大会に出席できない会員のために、最新の研究発表の動向を知らせる意味からも、トピックスを拾い出して短い原稿にまとめると面白いのではないだろうか。」
- F**：「言葉は生きていくというが、新しい学術用語が論文で使われても、定着しないで消えてしまうこともある。また、同じ言葉でも時代の経過とともに、はやりすたりがあり意味が異なってくることもある。気象学の用語だけではなく、隣接分野も含めて取上げる必要があるが、取扱いの難しい点もあるので、次期の委員会で検討するとよい。」
- J**：「用語解説は回を重ねて63回になった。これらを一つにまとめてもらえないか、との声が出ている。大変便利だと思うがどうだろう。なお、各人が切り取ってまとめるためには、表裏2頁にまとめてあると都合がよいのだが。」

2. 編集者が読者をつかんでいない

- K**：「(原稿が集まりにくいことについては)口頭で頼むのではなく、丁寧な依頼状など作ってある程度否応なしの依頼をしてはどうか。」
- G**：「アンケートの回収率もあまりよくないようだが、会員各位には自分たちの学会の機関誌であるという認識を持って欲しいものだ。」
- J**：「今回のアンケートは、前年1カ年分全部を取出して振り返ってみなければ書けない。甚だ面倒であり回

収率も悪かったのではないか。次回には、アンケートに必要な記事の題目全部を印刷しておくとか、全部の印刷が無理なら、対象をしぼって、A会員向けというか一般の会員向けに編集した記事を取上げて、それについてアンケートを求めるとか、テーマ別に求めるとか、回答しやすい方法を考えれば回収率はかなりよくなるだろう。」

- B**：「天気を出している我々が、実は読者をつかんでいないのではないか。先日、会員名簿で会員の職業を調べてみたところ、一番多いのが气象台、それにほぼ平行なのが住所のみで、これは気象分野外の人がほとんどだと思う。」
- A**：「対象がどういう層なのか、これがわからないと記事を集める事もむずかしく、このあたりの情報を得るためにアンケートに記入してもらうことになっていたが、アンケートがなかなか集まらなくて困っている。」
- F**：「学会出席者は全会員の1/10程度と聞いたが、残り9/10のいわば隠れた会員を知る事は大切だ。」

3. レフリーについて

- G**：「投稿者より、投稿してから実際に掲載されるまでの時間が長すぎるとの声が出ている。それに最近はレフリーが厳しすぎるとの声も聞くが。」
- L**：「印刷物として後世に残す点から、レフリーが厳しすぎることはないと思う。」
- M**：「レフリーは読者へのサービスとして少しでも良いものを残したいという気持ちであって、決して気に入らないから直させるとか、もちろん内容を制限する事になってはいけない。そこを誤解されている気がする。論文は、レフリーの方が見られたら著者にわかりやすいコメントをつけて著者に返す。これを原則として徹底してはどうか。」
- F**：「レフリーと編集委員との関係を再確認する必要がある。レフリーの意見をそのまま論文投稿者に要求してはいけない。レフリーは天気でも集誌でも同じように内容を検討してもらってよい。しかし、編集委員はそれをもう一度よく読んで書き換えて著者に送るのだから、その時に当然編集委員の判断が入る。著者の研究環境とか能力への配慮なしに不可能な要求をしてもいけない。また、一応こちらの意図を伝えても、内容に誤りがある場合は直してもらわなければならないが、細部についてはその通りにならないので載せられません、では困る。プロの研究者には厳しくても、そ

うでない人には弾力的でなければならぬだろう。投稿された会員も、レフリーは最良の読者という言葉もあるように、非常にていねいに目を通した上での意見であるから、謙虚に読んで取入れるものは入れるようにするのが当然である。私の経験でも、レフリーの意見から次に書くべき論文のヒントが得られたこともある。」

I：「論文とは、必ずしも完成した長文である必要はない。速報や中間段階のものでもよいし（例・英国のNature）、要するに面白いことが簡潔に記されていればそれでよい。その点、コンパクトな論文がもっとたくさん出るよう、編集の側からも投稿をつる努力をすべきであろう。」

F：「周知のように、集誌ではページチャージ（投稿料）を徴収しているし、気象庁の研究時報も頁数の制限がきつくなった。このような時、天気掲載論文が冗長であっては困る。投稿者は投稿規定を守るとともに、よくばらないでスッキリとまとめるように心掛けるとよい。」

4. もっとユニークな編集を

H：「（編集事務上の問題としては）発行日を守る事が先決だ。発行が遅れるとそれにつれて原稿が入るのもルーズになるという悪循環が起こってくる。とにかく、現在は原稿を集めるのに窮々としていて、集まった原稿を端から載せている状態で、これではユニークな編集はできない。事務処理を能率よくし、各記事の担当者を充実させて編集に余裕を持たせ、ユニークな雑誌を作っていきたいと思う。」

I：「本だな（書評欄）も、書評依頼のあったものを事務的に取上げるだけだった。

最近ジャーナリズムに迎合したような安直な気象の本も多々見られるが、もっとしっかりした目で気象学のテキストを峻別するのも本だなの役目だろう。」

N：「解説も、初歩的なものと、専門的に高度なものとの分けてみたらどうだろう。

また、会員が、気象学会あるいは気象学に関連した学界の、いろいろな問題について建設的な意見を述べることのできる、論壇のような欄を設けてみてはどうだろう。」

K：「（海外だよりを担当して）海外の人から見ると、天気には閉鎖的な面がある。あるいは国際的な視野に欠けるという声もあるようだ。そこで、国際的な動向

などを載せる意味で、方法としては海外在住の人にごんごん手紙を出し、それをまとめ、海外だよりをそういう方向に持っていかうと思ったが、実行できなくて残念だった。海外の情勢を論文を通してだけでなく、もっと早くに会員に知らせることは必要だろう。」

J：「学界の情報を伝える学界ニュース欄の新設について、情報網の確立とか担当記者の苦労の問題があるが、実現したい記事の一つだ。ニュース源に対してマメに足を運ばねばならないので大変なことだと思うのだが。」

L：「機関誌としての性格にも関係するかもしれないが、8月号に載った衛星写真のような写真を取入れることは、読者にとってよりなじみやすいものになるのではないか。個人的な事だが、広告の写真が入るようになってから今までよりも気軽さや親しみが増したような感じがする。今回のアンケート調査もより良いものという企画から始まったものだが、回収率が悪いのは、せっかく手に届いても読みこなせない、むずかしいから後でゆっくり読もうと思いが本棚にしまってしまう（極端な例だが）、つい連絡事項も目を通さないという人もあるのではないか。」

K：「編集書記をお願いするようになって、いままでは机上プランに終わった企画も、今後実現できる可能性が出てきた。しかし、会員3,000人、年会費6,000円程度の学会で論文誌の他に天気のような雑誌を月刊で出している学会は他になく、これだけのスタッフで続けていることは、並大抵の努力ではないことを、会員諸氏にも理解し、協力していただきたいものだ。」

5. 投稿するに際して

G：「原稿は冗長であっては困るという話は前にも出たが、特に表と図で同じ内容のことがダブっていたり、本文も工夫すれば簡潔にできるものが数多く見られた。“論文はいったん書き終えたら机の中にしまっておき、何日か経ってから読み直してみると、欠点が自分でもわかることが多い”と教えられたことがあるが、皆さんもこれを実行して欲しい。」

H：「“原稿の書き方”については以前天気に簡単な解説を載せたことがあったが、投稿される方にはいまいちどあれを読み直して欲しいものだ。特に告示やお知らせは早目に原稿を編集委員会に出してほしい（原稿締切りについては、前号（「天気」23.10.）585ページに詳しく出ています。）」

N：「近く改めて本誌に説明を載せる企画はあるのか。」

H：「事務局で考えている。特に、図は縮めることを考慮に入れて文字などもはっきり書いてほしい。地区によっては大変きれいな原稿が投稿されるところもあるので、指導者の方々にも、このことをよろしくお願

したい。」（論文の書き方については、本誌 631～634 ページをご覧ください。）

司会：「我々としては実力以上のものをと欲ぼるので大変だが、これからも、いっそうよいものを作るよう、努力していきたい。」

昭和51年度 日本気象学会奨励金受領者選定理由書

奨励金受領者：山田幹夫（高松高等学校）

研究題目：衛星写真を中心とした高校気象教育カリキュラムの改良

選定理由：

山田会員は昭和28年来一貫して高校教育に従事し、そのかたわら、気象教育改善に努力してきた。すなわち、これまでとかく平面的な説明になりやすく、天気図型の暗記に終わっていた気象の学習に、気象衛星写真の学習を取入れ、気象現象を立体的に理解させることを試みた。特に気象学習の基本である大気循環を30日平均半球雲写真などを利用して理解させるなどユニークな試みを行っている。

今後の計画として同会員は、NOAA データセンターから最新の雲写真を入手し、これらをもとにして、高校地学学習における気象学習を立体的かつ実証的なものに改善することを考えている。また同会員はさらにこれを気象学習のカリキュラムにまでまとめ上げる計画を持っている。

このような研究は、気象学の底辺を広げ、気象学の将来の発展に大きく寄与するものと考えられ、本学会はここに同会員に奨励金を贈るものである。

奨励金受領者：力武恒雄（名古屋地方気象台）

研究題目：中部日本の天候に関する解析的研究

選定理由：

力武会員は、昭和47年以来名古屋地方気象台で長期予報を担当しているが、そのかたわら、長期予報に関連する数々の研究を発表してきた。

夏期の天候については、高温発生時に、南アジアに中心を持つ上層高気圧の東方への張り出しが日本付近で北に偏していることを指摘し、それが日本付近の中下層の高気圧性循環におよぼす影響をうず度方程式等を用いて解析している。

また寒候期における、中部日本の天候経過と極東高緯度のブロッキング高気圧についての解析や、東海地方に

おける1年間の天候経過を極東における気圧配置と関連させた調査などが報告されている。このような調査はその地方の気象特性の把握を通して、長期予報の精度向上につながるものである。

力武会員は、上記の諸問題について中部地方の地域特性を考慮しさらに詳細な解析の研究を計画している。本学会は同会員の研究の成果を認め奨励金を贈って、同会員の研究の進展を期待するものである。

奨励金受領者：松村三佐男（室戸岬測候所）

研究題目：インデックス・サイクルの長期予報への利用の研究

選定理由：

松村会員は、昭和45年に気象大学校を卒業して、大阪管区気象台に勤務を始めて以来、大気大循環に興味をいだき、一貫してインデックス・サイクルの長期予報への利用を研究している。

松村会員は、これまでの研究において、東西指数の低い状態の顕熱輸送の問題に重点を置き、夏季の北緯50度に南に向かう顕熱輸送が存在して、チベット高気圧・北半球の超長波の発達、および干ばつを伴う西日本の酷暑に関連していることを定量的に調査した。この研究成果の一部は、すでに大阪管区気象台の長期予報にも利用されている。さらに同会員は、100mbならびに300mbの資料に重点を置いてインデックス・サイクルを計算し、ブロッキング高気圧の出現を予報する研究を計画している。

グループ計画など、世界的に気候変動に対する学問的研究の重要性が高まっている折から、本学会としてもこの種の研究の促進を図る必要を認め、同会員に奨励金を贈るものである。

同会員は、現在室戸岬測候所に勤務し、他の研究者との討論の機会を持つことがはなはだ困難な状態にある。本学会は同会員が奨励金を受領することによって、他の研究者との交流を頻繁にし、研究を充実させることを期待している。